

新刊

□李 永魯 Lee Yong No: 韓国植物図鑑
New Flora of Korea 2006 I, 976 pp., II, 888
 pp. 教学社. I+II 300,000ウォン.

韓国の全ての維管束植物を網羅した図鑑である。全て原色写真で、多くは必要な部分の拡大写真が添えてある。記載は韓国語であるが、名前はラテン語の他に、中国語、英語、日本語が添えられ、また巻末に新しく作られた学名が載せられている。韓国の植物を調べるのには欠かせない重要な文献である。ただ、記載は総て韓国語なので、せめて英語でも併記してくれたなら、もっと利用しやすいものになったであろう。(山崎 敬)

□神奈川県植物調査会：小原 敬先生著作集。
 A4版. 280 pp. 2007. ¥1,500. (送料別).
 同会. ISBN: no number.

小原 敬氏は神奈川県を中心に活躍しておられるが、それよりも科学史やとくにロシア語関係文献に詳しいことで貴重な存在である。1921年生まれの小原氏の活躍を記念して、このたびその著作集が刊行された。まず10名を超える方々による賛辞に続いて小原氏がその出自を簡潔に語っている。出生はアメリカだが小学生時代に満州へ移り、戦争、敗戦とご苦労を重ねながら藤沢に落ち着いたことが、略歴と共に読み取れる。著作目録では全作品242点が年代順に示されている。これに続く本書の主部では、①. 研究論文、②. 地域への貢献と分けて、作品のおそらくすべてが採録され、ところどころには小原氏の手書きの修正が見られる。巻末に研究史関係論文に出てくる人名の索引がある。このように個人の業績が一冊に集積され、履歴や背景説明が付加されると、あらためてその方の全貌を見直すことになり、感銘を受ける。希望者は表記調査会(250-0031 小田原市入生田499 神奈川県生命の星・地球博物館内)に申し込めば、請求書つきで送付するとのことだが、残部は少ないとのこと。(金井弘夫)

□安藤敏夫, 小笠原亮, 長岡 求(監), 森弦一(編): 日本花名鑑4 B5 551 pp.
 2007. ¥4,800. 日本花名鑑刊行会・アボック社(発売). ISBN: 978-4-900358-59-1.

本書の第二巻は2002年刊行で、当時紹介した。その後2003年に第三巻が出たのち、しばらく間をおいて今回の刊行である。前巻では野菜や果物にまで範囲を広げる意図が見られ、先行き手が廻らなくなるのではと心配した。本巻でも多少そういう種類が入っているが、どうやら花卉・緑化植物市場の流通品にひとまず絞っているように思える。

前巻までは植物の配列は植栽用途別で、各頁の袖にそれぞれ10種類のカラー写真が示され、ごく簡潔な名称情報、栽培情報、流通コードが記されているだけだったが、本書では配列は学名順、産地や形態についての文章体の記述がふえ、図鑑的に読める内容となっている。1994年に豪州で発見された中生代の遺存的裸子植物 *Wollemia* については、希少な野生集団を人間による絶滅から守るために、苗木の販売が始まったとの記事が見られる。

文章が増えた分頁あたりの種類数は減り、ざっと数えて6,000件を超える栽培品が、流通名と共に示されている。カラー写真は各頁4, 5枚となり、前巻より大きくなったが、発色については多少霞がかかったようで、もう一息というところ。収容する種類数が減った分を増頁で補っているが、値段とのかねあいもあり、当初の「流通市場の整理」という方針からブレが見られる。あまり欲張ると収拾が難しくなるので、こゝらで編集方針の整理が必要だろう。次の巻はどのような形になるのか、続刊を期待したい。(金井弘夫)

□大場秀章(編): 植物文化人物事典 A5版.
 632 pp. 2007. ¥7,600. 日外アソシエーツ.
 ISBN: 978-4-8169-2026-4.

副題は「江戸から近現代・植物に魅せられた人々」であるが、英文表題の *A Dictionary of Botanists and Persons Concerned with Japanese Plants* の方が、内容をよく表していると思う。われわれが常識的に考える「学」の範囲を取り払って、実業、芸術、趣味、政治と、職業

や分野を問わず、とにかく日本の植物に関係を持った人物1,157名の銘々録である。外国人も多少混ざっているが、ほとんどは日本人である。内容は氏名、その読み、生没年月日、肩書、出生地、親族、学歴、師弟、所属団体、受賞歴などの羅列の後に、経歴や業績が文章体で述べられている。この文章の部分は簡潔ながらもかなり突っ込んだ表現で、つい読まされてしまう。これに続いて著作、評伝が列記されているが、人によってはずい分詳しく、たとえば白井光太郎では64件も挙げられている。編集にあたった大場秀章氏の努力を多としたい。

このように多方面な人物を拾うのだから、当然ながら欠落も目につき、あってよい等の人物や書かれてよさそうな業績が載っていないか、生没年が不明だったりという例は少なくない。私もこの紹介文を書きながら、自分の記録とつい引き比べてしまうので、書くのにとっても時間がかかってしまった。はじめから完璧を求めるのは無理だから、気付いた利用者は随時追加訂正を入れて行けばよからう。対象は物故者なのだから毎年増える。だから出版社としては、こういうものを作った以上は、そういう訂正追加の受け皿を作っておいて、何年おきかに改訂版を作ることを考えてはどうだろう。近頃はプライバシーとやらで、こういう「個人情報」を他人が取得することがたいへん難しくなった。国立科学博物館では、毎年作って配布していた職員録を作らなくなってしまったし、転居先などを簡単には教えてくれない。私は氏名・年齢・性別・住所・電話番号のたぐいは個人を特定するマーカーであって、「個人情報」ではないと考えているのだが、都合の悪そうなことを隠したがるお役所や企業やは個人まで、「個人情報」という単語を黄門様の印籠のように利用する。「個人情報」には公的な定義がなく、お役所の各部局が勝手な解釈で使っているということは、法制局も総務庁も認めている（日本植物分類学会ニュース No. 93 (1998)）。本書に「個人情報」を書かれた

ことに文句を付ける人が出ないとも限らない。マスコミ側は、それに対して毅然たる態度をとれるのだろうか。（金井弘夫）

□清末忠人：わたしの歩み—清末忠人研究集録。B5版。348 pp. 2005. ¥2,500. -ISBN: no number.

亡くなった友人の勧めにより作ったと前書きに書かれていて、作品49点を再編集してスタイルを統一し、読みやすくなっているのだが、ご自分がまとめたものだけに、個人的感想や意見はあとがき2頁と略年譜1頁にとどまり、もっと書いておいて下さればよかったのにとと思う。とくに1931年のお生まれから今日に至る途上の社会的背景は個人ごとに異なるので、読む人の参考になるのではないだろうか。次の機会にはお願いしたい。しかしこうしてまとめられると、植物だけのおつきあいと思っていたのに、動物や菌類まで広範囲に研究されていることを知り、認識を新たにした。連絡先は 680-0037 鳥取市元町 104 である。（金井弘夫）

□菱山忠三郎：ぐるっと日本列島野の花の旅 B5版。383 pp. 2007. ¥2000. 山と溪谷社。ISBN: 978-4-635-2301-6.

図鑑やカルチャースクールで名のある著者が、「自然の花が好きで見に行きたいが、どこへ行けばよいか」と思案する人へのガイドとして、北海道から沖縄県まで全国107箇所を、自身の体験に基づいて紹介している。紹介と言っても行ったときの出来事に沿った随筆のような柔らかい文章で、教えようとする堅苦しさは感じられない。植物名はたくさん出てくるが、それらの解説はほどほどで、RD種にだけその記号がついているのが、唯一の学的要素である。「この花を見るには」という人は、巻末の索引をたどればよい。小さな白黒写真がついているがいずれも景色で、植物やコース図は菱山夫人の手になる線画である。寝ころがって拾い読みするのに適した、楽しい本である。（金井弘夫）